

「財務大臣より水大臣をやりたい」

中川昭一・元財務金融大臣を偲ぶ

グローバルウォータ・ジャパン 代表 吉村和就

(国連環境技術顧問)

多くのマスコミでは「拉致問題や酔いどれ会見」の内容を詳述しているが、中川元大臣と水との関係をのべているメディアは少ない。

我々、水関係者にとり、中川元大臣は、水問題を国家的な論議レベルまで引き上げた立役者であり、また国を挙げて取り組んでいる「水の安全保障戦略機構」の生みの親である。ここに中川元大臣の「世界の水・日本の水」問題解決に掛けた思いを述べてみたい。

3年ほど前に、中川先生から「グローバルな視点から水問題を考えたいのでレクチャーをお願いしたい」と筆者に要請があり、それ以来のつきあいであるが、とにかく水問題解決に熱心であった。

自民党が大敗した衆議院選挙後に3回、都内でお逢いして水問題を深く談義したが、最後にお逢いしたのは9月24日、訃報に接する10日前である。

都内の寿司屋で「世界と日本の水問題、そして日本の水戦略」を語り合った。中川先生から「吉村さん、選挙でお世話になったので、この本を・と、昨年発刊された中川昭一著「飛翔する日本」(講談社インターナショナル)を頂いた。この本が、私にとり先生の形見となった。

その本の中にも、水に関する中川先生の思いが、随所に亘り述べられている。すこし紹介したい。「ローマ帝国はパンとサーカスで国民を楽しませているうちに、周辺が力を付け、食料問題や水問題も深刻化して国家が衰退した。」さらに「深刻化する水問題」としてバイオエタノール作物と水問題、バーチャル・ウォーター、そして水利権の問題など6頁にわたり書かれている。

ある時、私が「なぜ中川先生は、水問題にのめり込んだのですか？」と聞くと、「私は農水大臣と経産大臣を務めた時から水に関心を持っていた。人々は金融や経済を単独で論じているが、私はその経済を本当に支えているのが「水」ではないかという思いを強く持つようになった。その疑問を解くために私は水に関する多くの本を読んだが、しかし、勉強すればするほどわからなくなった。そこで専門家の意見を聞くために研究会をつくったのだ」と。

中川先生の知識欲も凄い。本を読むために、「1日30時間は欲しい」は先生

の口癖だった。事実、赤坂の個人事務所の床にはそれらの本が積み上げられている。

私が先生の質問に答えて「地球温暖化と水資源の関係、世界の水総量や海水淡水化の原理や日本の膜メーカーの活躍、さらには世界水ビジネス市場の大きさ」などを話すと、かならず詳細なメモをとり、帰りには「これでいいですか」とメモを復唱する、まさにメモ魔である。特に固有名詞と数値にはこだわっていた。

だが中川先生がどこかで講演されるときは、メモ一つ見ないで、一時間でも2時間でも水問題を熱く語っている。筆者も東大の安田講堂や、東京ミッドタウンでの中川先生の講演を聞いたことがあるが、本当に「水に関するデータ」が頭の中に完全にインプットされている。現在の国会議員の中に、水問題で何も見ないで2時間以上語れる人は、いないだろう。ものごとの背景を完全に理解し、しかも素早く行動する本当の政治家の姿である。

頂いた「飛翔する日本」の中に、メモに関する興味深い記載があるので紹介する。(220頁より)

『日本は世界で最も農産物を買っている国であり、経済規模は世界で2番目だ。それが(WTO)から外されてしまったのは・・(中略)世界銀行総裁のロバート・ゼーリック氏等が、「日本人に会うのは時間の無駄だ」と考えたからだ。(日本)から課長が来ても、局長が来ても、大臣が来ても、みんな原稿を見ながら同じことを言う。こんな相手と話をしても意味がない。それで外されたのである。ある意味では合理的だ。

私が経済産業大臣になったときに、ゼーリック氏に面談を求めると、彼は会わないと回答してきた。そこで、一度、無理やり会う機会を得て、ポイントを頭に入れて、なにも持たずにしゃべった。ゼーリック氏も非常に乗ってきていい議論になったが、彼は小さなメモを用意し、テキパキと話し続ける。ときどきそのメモに目をやるので、私が「メモを見ながらしゃべるのか」と言ったら、「日本人にそういうことを言われたのは初めてだ」と怒った。そして仲良くなくなった。』

なるほどである、要点を頭の中にたたき込んで会談に臨み、どんな難問にもすぐ対処する。何事にも命がけで望む中川先生の姿勢に頭が下がる思いである。

しかし中川戦先生から時々、とんでもない問いかけがある。

ある時「水を粉末とか体積を小さくして、運搬し、世界の水に困っている人々に貢献できないのか、技術的に考えろ、君は水の専門家だろう!」と言われて、困ったことがある、とにかく物事を詳細に調べた後で、とんでもない質問を投

げかける人であった。

中川先生は、水の安全保障機構の立ち上げについて、常に「水の安全保障」は国民全体の利益であり、超党派で取り組むべき課題であると強く主張され、機構の設立前に自ら公明党の浜田昌良・国際局長や民主党の直嶋正行・政調会長（現在、経済産業大臣）を訪ね、機構への参加を要請している。

また財務・金融大臣を兼ねていた時は、世界中が金融恐慌で激動する中でさえ、水問題が忘れられないらしく、我々（竹村公太郎氏、山田正教授、筆者）はよく昼食時間（大臣が自分の時間を使えるのは、この昼食時間しかなかった）に財務大臣室に呼ばれ、戦略機構の進行状況や水をめぐる話題について、報告を求められていた。帰り際に「財務大臣より、水大臣をやりたい」と言われ、一同驚いたが感激して財務省を後にしている。

さて8月に衆議院選挙戦に入り、小生は韓国から招待され、世界都市水フォーラムで講演したが、帰りの飛行機の中で、新聞を見たら「大物議員落選続々」と書かれて、トップには中川先生の名前が……。帰国後すぐさま、帯広に選挙応援に駆けつけた。

現地では、中川先生の長年の友人であり家族づきあいをしてきた中曽根弘文外務大臣や、中川先生の考古学の先生である吉村作治先生も駆けつけていた。中川先生、選挙カーで演説したあと、小生に近づいて来て「吉村さん、選挙が終わったら、シンガポールのニューウォーターセンターを見学したい、案内してくれ、水の国際会議も行きたい」といわれ驚愕した。

「先生、まず当選することが先決です」と申し上げた。とにかく水問題解決が、彼の頭の中を駆け巡っていたのだ。帯広市内で開かれた夜の個人演説会では、中川先生は、今日は「ミイラの吉村作治先生と、水の吉村和就先生がお見えになっています、お二方とも私の個人教授です」と紹介し、会場の笑いを誘っていた。もちろん帯広の水の大切さに言及し、私には政策論議よりも力が入っていたように思える。

応援演説に立った私は「中川先生の最大の欠点は、酒ではありません。自分の成し遂げた業績を自己PRしないことです。他の政治家は、すこしでも、それに触れると、すべて自分がやったと自己PRします。中川先生は本当に自己PRがヘタです」本人は苦笑い、会場は笑いに包まれていた。

しかし選挙結果は皆様ご承知の通りで、自民党が野に下り、中川先生も、比例でも復活を果たせず苦杯をなめた。帯広から東京に帰られてから、会った時



都内で会食

には、「26年間、夢中で走ってきたが、天から与えられた良い機会なので、来月から妻と一緒にエジプトに行くことにした、楽しみにしている。ところでエジプトの水問題は？」と聞かれたので、エジプトは大変です、ナイル川流域国は11ヶ国あり国をめぐる水紛争の真つ最中ですよと答え、11月に発売される筆者の「世界の水がなくなる日」角川新書のゲラ原稿の一部を差し上げたら、またそこでメモを執り始めた。

翌日、中川先生の秘書から電話があり「本屋で探したのですが、先生から紹介された本が無いようですが・・・。私が11月角川書店からの発刊ですよと答えたら、そうですか中川から全文を読みたいので、すぐ買うように言われましたので・・・」まさに本の虫である。

10月9日、東京元麻布の善福寺で執り行われた中川先生の告別式に参列した。喪主である郁子様が「56年間の生涯で皆様方に大切に、大切にしていたいただいたこと、心から感謝しておりますと、主人の声が聞こえるような気がします・・・(略)主人はライフワークとして「水の研究をしたい」とも申ししておりました。」

お別れの言葉を聞きながら私は涙が流れてきた。これほどまでに水にのめり込んでいたのだ。頂いた本の中に「世界の問題は、日本の問題である。水資源小国である日本にとって、水問題は他人事ではない。水の有効活用と資源の保全を心がける必要がある。」それが日本の生きる道であると示唆していたようである。

水問題解決に先陣を切り活躍された、中川先生に心から冥福をお祈り申し上げます。(合掌)